



—東地中海地域ニュース—

シリア：抗議行動の起こる可能性

(2月5日付レバノン・ナハール紙)

レバノンの5日付ナハール紙は、「アラブ諸国民の抗議の波がシリアにも波及するか」という題名で論説を掲載している。

1. エジプトなどのアラブ諸国で生じている抗議運動の波がシリアにも波及するか否かについて、レバノンやアラブ諸国のみならず、米国を含む西欧諸国でも議論されている。この点について、かつて米国務省、NSCに所属し、シリア、イスラエル地域に精通している高官は次のように述べた。

(1) シリアの反体制派はダマスカスや他のシリア国内で「怒りの日」が到来することを待ち望んでいる。彼らは他のアラブ諸国民が使用したあらゆる手段を使用して、汚職、抑圧、困難な経済状況、表現の自由の制限、人権尊重の不在を訴えている。

(2) シリア政府はアラブ諸国で起こっていることを重大な関心をもって見ているが、おびえや困惑している様子を見せないようにしている。バッシャール大統領が最近のWSJとのインタビューで、政治改革を含む改革を近く行う予定であると述べたことは、これを間接的に示している。他方、同大統領が79年のイラン革命が現在のアラブ諸国での動きを誘発したと述べたことに関しては、イランと同盟関係にあり同国と戦略や政策が一致しているシリアは安定しているということを示したかったのかもしれない。

(3) シリアとエジプトの間には類似点も相違点もある。前者については、世俗政権、軍クーデタによる政権獲得、息子への権力継承（エジプトではそれが失敗したように見えるが）が挙げられる。後者については、エジプトが西欧に目を向け、米国と同盟し、イスラエルとも和平を結んだ一方で、シリアは東へ目を向け、ソ連、その後はイランと同盟を結び、拒否戦線を形成している。またエジプトでは表現の自由、批判、報道の自由が一部認められているのに対し、これらはシリアには見られない。イスラミストはエジプトで抑圧されているが、シリアでは破壊された。

(4) バッシャール大統領はエジプト情勢を注視している中で、国民の抗議に対してすばやく、強力に対応しなかったムバーラク大統領に非があると心の内で考えていると思われる。バッシャール大統領はその父から、強権をもって支配し、そのためには強力的な治安

機関を使用し、いかなる分裂や抗議にも寛容であってはならないことを学んだ。

(5) バッシャル大統領が実行可能な最低限の改革を求めるデモを自ら組織し、アラブ諸国に広がる抗議を阻止しようとしても不思議ではない。ただし確実なのは、政権にとって挑戦とうつる動きに対しては、すばやく強力な措置がとられること、また、改革を欲するシリア人は、彼らがエジプトやチュニジアと同じことをしても、同じ結果を得られるとは考えていないことである。彼らに犠牲を払う用意があるようには見えない。いずれにせよ、エジプトで起きていることに対するシリア人の分析と評価が、数日もしくは数週間の彼らの選択決定の要因となろう。

2. 上記分析は正しいであろうか。かなりの部分は正しいように見える。しかし、ダマスカスで「その日」がくるまで、あるいは今後数日、数週間待たなければ、答えには到達できまい。